慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	野々村一雄著 ソヴェトの経済力
Sub Title	
Author	加藤, 寛
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.12 (1961. 12) ,p.1129(93)-
JaLC DOI	10.14991/001.19611201-0093
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19611201-0093

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

られるが、これをさらにより分明に示していただきたかったと思われる。

（本書の著者は関西大学教授、商学部にて保険論担当、本書は「序」三頁、「凡例」一頁、「目次」五～一七頁、「本文」一～三〇一頁、「付録A・B・C」一～八頁、昭和三十六年九月二十日、第一刷発行、ミネルヴァ書房、A5、六九〇円）

＊　＊　＊

（注）　アメリカにおける年金制度に関する最近の文献は次のごとし。

1. Hugh O'Neil; Modern Pension Plans. Prentice-Hall, N. Y. 1948.
2. Fleming Bomar; Handbook for Pension Planning. The Bureau of National Affairs, Washington, D. C. 1949.
3. Carroll Boyce; How to Plan Pensions. McGraw-Hill, N. Y. 1950.
4. John H. Magee; Life Insurance, Richard D. Irwin, Chicago, 1951.
5. Louise W. Ilse: Group Insurance and Employee Retirement Plans, Prentice-Hall, N. Y. 1953.
6. Kenneth Black, Ir.; Group Annuities, University of Pennsylvania Press, Philadelphia, 1955.
7. Dan M. McGill: Pensions; Problems and Trends, Richard D. Irwin, Chicago, 1955.
8. Adelbert G. Straub. Ir.; Examination of Insurance Companies. Vol. 5, N. Y. State Insurance Department.

新刊紹介

野々村一雄著『ソヴェトの経済力』

著者の手なれた筆は、ソヴェト経済の現状を、工業・農業・流通・生活水準など、いろいろの角度からパノラマ式に読者の前にくりひろげてくれる。

たとえば著者は、工業の生産力についてこう言っている。一九五九年のソ連の水準は、英・仏・西独三国の合計にほぼ等しく、アメリカの約七〇％。一九六五年には、石油・ガス・電力・人造合成繊維部門の立ちおくれを除けば、一九五九年のアメリカの水準とほぼ等しい。しかし人口一人当年産高（一九五九年）は、アメリカはもとより、英・仏・西独のどの一国よりも劣り、とくに近代的エネルギー産業・化学工業のおくれは著しい。これはソ連のすぐれた宇宙船や工業力が、他の部門を犠牲にしてかなり無理した結果であることを示す。しかし、だからといってソ連の工業力を軽視してはならないと著者は考える。ソ連は着実に成長を続け、七〇年代から八〇年代の末にかけて、おそかれはやかれアメリカ工業を、人口一人当生産高についても凌駕する筈である。

このことは農業についても同様である。かつては工業重視のあまり農業を停滞させてきたが、今後は、灌漑・植林のための国家投資の増大、機構改革などによって成長を続けるであろう。工・農をとわずあらゆる経済面にいろいろな解決すべき問題は残っているにしても、恐慌がなく、失業がなく、敵対階級のない社会主義制度が確保されている限り、これらの困難は、計画技術の進歩とともに消滅していくのだと著者は確信している。

だから、工業・農業・サービス業のあらゆる分野に発生している官僚主義的傾向すらも、著者によれば過渡的腐敗にすぎない。しかし実の所私たちはこのことに最大の危惧を感ずるのである。計画経済が最も能率的であり国民の意志を反映するためには、一党独裁のシステムが果たしてよいことなのだろうか。官僚化傾向や寄生者の出現傾向は、ソ連型社会主義にとって過渡的なものなのだろうか。この重大な問題に対して、著者はかなり安易に考えているようだ。この点を除けば、旧版「ソ連邦の経済」ではソ連の文献しか信じない「ソ連屋」さんだった野々村氏が、本書では大幅に批判をとりいれ、「平均的な思想」に近づいている。

野々村氏の「経済学力」の進歩であろう。

（岩波新書・二三〇頁・一〇〇円）

—加藤　寛—

＊　＊　＊

土屋喬雄監修 全国地方銀行協会編『地方銀行小史』

日本資本主義の発達史的研究は、今日、漸く従来の教科書風な概説的形式あるいは経済史の裏付けの不十分な政治史的形式のものを脱して、個別問題的研究、政策史的研究、産